

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 伊藤慎吾、中村正明著『〈生ける屍〉の表象文化史：死霊・骸骨・ゾンビ』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上石田, 麗子, Kamiishida, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000709

紹介

伊藤慎吾、中村正明著

『《生ける屍》の表象文化史

—死霊・骸骨・ゾンビ—』

上石田麗子

日本のホラー映画好きならば、最近のJホラーで怪異が幽霊よりもゾンビとして描かれがちなトレンドをご承知と思う。「幽霊」が出てくるべき場所では、「ゾンビ」を見せられている、そんな気分になったことはないだろうか。私は多々ある。本書は、霊体表象ではなくゾンビ表現が主流となった原因を理解するのに最適な研究書だ。本書の前半は著者二人の専門である日本文学における、幽霊および死霊の表象、後半はゾンビのサブカル的通史に焦点を当てている。各部のタイトルをジョージ・A・ロメロのゾンビ三部作にかけている。かといって、ゾンビの概説書ではない。その狙いは、伝統的な日本の死霊観にゾンビを位置づけることである。

筆者らは、「ありささん」や「テケテケ」といった「都市伝説の中で《幽霊》として語られるものは、もはや伝統的なイメー

ている」(二〇六頁)と述べる。本書はどのような霊体から実体への変化につき、「これらの現代の怪談からは、幽霊から部位欠損の肉体を伴う死霊の増加、幽霊からゾンビへの変質という傾向が読み取れるのではないか」(二〇八頁)と推論している。「幽霊」という霊体が大勢を占めていた近代という時代が終わわり、肉体を伴う死霊の時代を迎えたのだ」(二〇九頁)と、筆者らは結論づける。「魂が管理される一方で、遺された肉体や骸骨の物語が紡ぎ出され、視覚化されていた」(三七四頁)流れを、本書は余すところなく紡ぎ出している。

本書の文化・年代横断的な霊魂・死霊表象分析の大胆さを数例挙げると、古代からの転生譚と二〇一〇年以降台頭してきた異世界物を「霊魂の入れ替わり」の物語原型を踏襲するものと論じ(十五頁)、貞子ⅡウィルスⅡゾンビウィルスの線で結ぶ(四三頁)といった試みがある。

日本文学の研究成果に則った死霊表象研究と、ゾンビのポピュラーカルチャー研究の橋渡しとなる野心的著作である。

(B6判、四三二頁、青土社、二〇一九年四月発行、定価二四〇〇円＋税)